森本　あんり著

魂の教育

よい本は時を超えて人を動かす

懺悔録を思い起こさせる自分史

読書を通じた神学者としての思索の歩み

斎藤　佑史

懺悔録と言えば、アウグスチヌスやルソーの懺悔録が有名であるが、本書はどこかその名を思い起こさせるような要素のある、現在の日本で神学者として活躍する著者の自分史である。神学というからにはもちろんキリスト教と深く関わるが、一言で言えば、著者がこれまでいかにしてキリスト教に出会い、召命を受け牧師となり、さらに神学研究のためアメリカに渡り、その後帰国して神学者としての道を歩んできた軌跡を描いたのが本書である。そのために読書体験がいかに重要か、読書遍歴がいかに自分を育ててきたか、それを少年時代に遡って『ファーブル昆虫記』を手始めに著者は語り始める。その後、著者に影響を与えた本が次々と登場するが、その出会った本との著者との関係を辿ることによって、著者の人間形成が見えてくるところが、本書の特徴であり見所と言ってよいであろう。

最初に懺悔録的な面が本書にはあるとしたが、著者の少年時代から青年時代にかけての問題児的な行動を暴露し、自省の念を込めて回想しているところがまず散見されるからである。そこには不幸な生い立ちから生じた絶望と社会への反抗心など思春期に特有の心理的告白があり、その不安な危機的状況を著者がいかに乗り越えてきたかが示される。それはドイツ文学の教養小説を思い浮かばせるものがあるが、この教養という概念も本書の一つのキーワードである。小石川教養主義という旧制中学の伝統を残した高校の空気を吸って、一切の受験勉強をせず、受験に関係のない読書を乱読した挙句、ICUというキリスト教の大学に活路を見出す著者の軌跡は興味深い。つまり読書でマルクスの「宗教は民衆のアヘンである」を固く信じた高校生の著者が、ICU時代に洗礼を受けるまでコペルニクス的転回を遂げる話には、読者を惹きつける内面的なドラマがある。

本書では著者が学生時代を過ごした自由で闊達なICUの学生生活がエピソードを交えて多く語られ、その後東京神学大学に再入学し、神学を学んだ後、四国の松山城山教会に牧師として招聘される経緯が述べられる。そこで牧師の実践を行った4年後に著者は、さらに神学を深めるためにアメリカのプリンストン神学大学院に留学する。この神学者としての基盤を築いた5年間の留学生活の記述が、本書ではもっとも多くの頁が費やされ、それだけに著者の人生にとってその時期がいかに重要であるかがわかる。著者は留学先でアメリカのキリスト教史、ピューリタリズムを研究するが、それが後にトランプ現象のアメリカの反知性主義の解明などの自身の著作につながっていくことになるが、本書で注目すべきは、留学時代を含めて、著者が神学者として自立し、研究を深化させるにあたって実に多くの本との出会いがあり逐次紹介されているが、専門書であっても、一般読者にもわかるような配慮が随所にみられる点である。当然キリスト教関係の本が多くを占めるが、著者の関心は、キリスト教だけを絶対視するのではない比較宗教学にもあるので、たとえばウェーバーの『古代ユダヤ教』や井筒俊彦のイスラム教関係の本を取り上げ紹介しているのも興味深い。中でも評価の興味を最も引いたのは、著者の信仰とも深く関わるが、森有正との著作との関係である。この出会いこそ、著者のキリスト者としての活動の原点にあるように思えるからである。

以上、本書の概要をみてきたが、そこには著者の読書を通じての神学者としての思索の歩みがよく読み取れ、また時に難解な問いかけがあったり、人生について真剣に考えさせられる一方、本書はアメリカ留学体験記のような異文化理解に資する本としても読むこともできるであろう。さらに難しい議論の脇には息抜きのようなエピソードがあり、時に脱線して笑いを誘う箇所もあり、堅苦しくもありながら著者の人間味あふれる個性が感じられるのも本書の魅力である。（さいとう・ゆうし＝東洋大学名誉教授・ドイツ文学）

★もりもと・あんり＝東京女子大学学長・神学・宗教学。著書に『反知性主義』『不寛容論』『キリスト教でたどるアメリカ史』など。

四六判・270頁・3190円
岩波書店
978-4-00-061669-0
TEL.03-5210-4000